北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

教員養成課程における能の学習プログラムの構築 ―学生の活動とアンケートにおける声と身体に着目して―

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-04-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中西, 紗織
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008511

釧路論集　－北海道教育大学釧路校研究紀要－第47号（平成27年度）
Kushiro Ronshu, - Journal of Hokkaido University of Education at Kushiro - No.47(2015):97-106

教員養成課程における能の学習プログラムの構築
――学生の活動とアンケートにおける声と身体に着目して――

中　西　紗　織

北海道教育大学釧路校音楽教育講座

A Study on Developing Learning Program of Noh in the Teacher Training：Focusing on Voice and Body in the Class Activities and in the Questionnaire Survey for University Students

NAKANISHI Saori

Department of Music Education, Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

要旨

これまでに筆者は，能における声の演技や表現に着目し，声を身体の側面からとらえ直し身体の深みから始まる息や声の表現について論じることを試みてきた。さらにそれに基づいて，声と身体に焦点をあてた能の体験学習の効果を確認し，その意義と可能性について考え続けている。学校教育において，和楽器や日本の伝統音楽を扱った授業が益々重視されている中で，音楽に関する要素が豊富な能は，多様な入口と拡がりを持っている。しかしながら，音楽科で行われる活動は，「歌唱」「器楽」「音楽づくり／創作」と「鑑賞」である。能は演劇であり歌舞劇である。楽器や声による音楽的な要素とともに舞・所作や演じることが重要な部分を占める。声による表現（謡）と身体による表現（舞）が一体となって演劇的な表現の奥行きを一層深めているのである。このような「身体性」に関わる学びこそ能の大きな特徴の一つである。このことから，筆者は声と身体を結びつけた学習活動を基本として，音楽科の枠組みを超える能の体験学習による学びを音楽教育に生かしたいと考えている。

本稿では，教員養成課程の大学生を対象として行った能の体験学習とアンケートの結果から，声と身体に着目して活動内容を検討した。そして，筆者が作成した能の学習プログラム試案を見直し，取り扱うべき内容を再考し，教員養成課程における能の学習プログラム再構築の方策と可能性を探った。

はじめに

これまでに筆者は，能における声の演技や表現に着目し，声を身体の側面からとらえ直し身体の深みから始まる息や声の表現について論じることを試みてきた（中西　2011など）。さらにそれに基づいて，声と身体に焦点をあてた能の体験学習の効果を確認し，その意義と可能性について考え続けている（中西　2011，2015など）。その出発点にあるのは次のような疑問である。能は演劇であるにもかかわらず，なぜ音楽科の授業において「伝統音楽」という枠組みに押し込められるようにして取り上げられるのか。学校教育において，和楽器や日本の伝統音楽を扱った授業が益々重視されている中で，音楽に関する要素が豊富な能は，多様な入口と拡がりを持っている。しかしながら，音楽科で行われる活動は，「歌唱」「器楽」「音楽づくり／創作」と「鑑賞」である。能は演劇であり歌舞劇である。楽器や声による音楽的な要素とともに舞・所作や演じることが重要な部分を占める。声による表現（謡）と身体による表現（舞）が一体となって演劇的な表現の奥行きを一層深めているのである。

伊野（2011）は，音楽科の活動の中に「舞う・踊る」といったカテゴリーがないことや，「音楽科の思考法は，身体を通してわかっていく思考法とは，必ずしも一致しない」（p.12）ことの問題点を指摘し，「身体性と分離することによって，音楽教育がどれほど多くの音楽の可能性を放棄してしまったかについて，過去や現在における音楽の様々な有り様を再度見つめ直し，考えなければならない」（p.13）と説いている。「身体性」に関わる学びこそ能の大きな特徴の一つであるのだから，筆者も「身体性」と分離せずに，声と身体を結びつけた学習活動を基本として，音楽科の枠組みを超える能の体験学習による学びを音楽教育に生かしたいと考えている。

本稿では，教員養成課程の大学生を対象として行った能の体験学習とアンケートの結果から，声と身体に着目して活動内容を検討する。そして，筆者が作成した能の学習プ

ログラム試案を見直し，取り扱うべき内容を再考し，学生の実態に沿った，教員養成課程における能の学習プログラム再構築の方策と可能性を探る。

1　能の学習プログラムの指針と方向性

これまでの実践から，現時点において以下の五点を指針として提示している（中西　2015）。

①声と身体に焦点をあてた学習内容を工夫する[1]——能において謡・舞の結びつきによる表現の重要性を理解する。

②能の実演家を学校教育の場に招き直接本格的指導を受けることと，学生が能の実演家のフィールドを訪問すること（「わざ」世界への潜入[2]）の両方を行う——フィールドではない場で「伝える」ことの問題や課題に学生が気づくきっかけとなる。

③能の実演家と大学教員が協力・連携して学生のための能の指導を行う——学習の場に応じた実演家と大学教員の役割を考慮し，協力・連携の可能性を探る。

また，学習指導要領音楽編に照らした指針としては次の通りである。

④声の音色の多様性に着目する——西洋の発声法との違いに着目するだけでなく，能を演じる中で登場人物にふさわしい，声の音色を意識した表現を工夫する。

⑤間・息・身体の動きを関連づける——謡と舞がいかに結びついているかを理解する。

筆者の指導による大学の授業は，①④⑤に基づいて行っており，おおむね次のような内容を扱っている。

〇能の歴史と背景
　能の歴史・成立背景を知る
　世阿弥の伝書に書かれた言葉や世阿弥の演劇論にふれる
〇能の鑑賞
　映像資料によって能の演劇的特徴を知る
　能の物語や詞章に親しむ
〇能の実技体験
　仕舞の一部を実際に舞って見せる（着物と袴着用）
　謡と舞・所作（カマエ・ハコビ（摺り足））の体験

2　声と身体に焦点をあてた能の体験学習とアンケートについて

ここでは，小学校音楽科教育法で受講生を対象として行った授業アンケートの記述について検討する。

2－1　謡と仕舞の体験学習

実施日：2014年7月7日　2時限目（10：40～12：10）小学校音楽科教育法　全15回のうちの1時限。受講生（約80名）を二つのグループに分けて45分ずつの授業。
場所：北海道教育大学釧路校　多目的室
対象：「小学校音楽科教育法A」履修者（主に3年生）
　　アンケート回答者79名
授業者：筆者
授業内容：
〇能の歴史，演劇的特徴について解説
〇能の映像鑑賞——能《土蜘蛛》の一部，仕舞《鶴亀》《羽衣》
〇仕舞《鶴亀》の謡体験，カマエ・ハコビ（摺り足）の体験

受講生の中には，生で能を観たことがある者も数名いたが，実技の体験は一人（学習発表会でやったことがある）を除いて初めてだった。カマエとハコビについては積極的に参加していた。一方謡については，後述するが，アンケートに「声を出すのが難しい」「謡の音階が独特で難しい」などのコメントが目立ち，声を出すことに戸惑っている様子が見て取れた。仕舞《鶴亀》（観世流）はツヨ吟[3]の謡でメロディーが複雑に変化するようなところはあまりなく，比較的初心者が学習する曲ではあるが，能の発声や声の張り方が難しいとか，能の謡独特のナビキ（一種のヴィブラート）に気づいてそれが上手くできないという感想もあった。

2－2　アンケートより

この時に実施したアンケートの質問項目は以下の通りである。

1）日本の伝統音楽・伝統芸能について
①どのような印象・イメージを持っていますか。
②能のどのような要素が気になりましたか。（装束・面・楽器・音楽・表現・所作・物語など）
2）謡・型（カマエ・ハコビなど）の体験について
①謡と型を体験してみてどうでしたか。印象に残ったのはどのようなことでしょう。
3）能に対する印象・イメージについて
①面白かった／つまらなかった／よくわからなかったなど
②全体的な感想など（あらためて考えたこと，気づいたことなど）自由に書いてください。

以下にそれぞれの質問項目への答えをまとめてみる。学生が記述した言葉をそのまま取り上げる。数字はその内容の回答人数。一人が複数の内容を記述している。下線は筆者。

1）日本の伝統音楽・伝統芸能について
①どのような印象・イメージを持っていますか。

声・身体に関すること
・動作がゆっくり／ゆったり12
・<u>スローな音楽にスローな動き</u>1
・流れるような動きで<u>曲を動きで表現する</u>もの1
・<u>ピョンピョンはねて野太い声で物語を唄っている</u>イメージ1
・日本の文化と伝統を音とともに踊りで表現するもの1
・優雅な音楽や動き1
・独特の発声1

・男の人の低い声1
・ゆっくりした口調1

音楽に関すること
・笛と太鼓／太鼓の音5
・箏，三味線5
・歌のリズムが不規則で面白い1
・歌というよりも語り1
・規則正しいリズムがない1
・独特の間1
・不気味な音楽1
・越天楽今様，尺八，笙，びわ，三味線，つづみなど1

自国の文化・日本らしいと思える美意識
・静かなイメージ／静かな空気7
・まさに「和」のイメージ／ザ・ニッポンって感じ2
・日本の大切な文化／日本にしかない素敵な文化2
・高貴なイメージ2
・扇子を使う2
・風情がある／風流2
・礼儀作法を重んじる2
・奥ゆかしく雅で趣があるもの，昔の貴族がたしなんでいるイメージ／奥ゆかしい2
・上品1
・昔から大切にされてきたもの1
・日本の歴史をわかりやすく現代に伝えようとしている1
・いつの時代になってもなくなることなく，日本を代表するすばらしいもの，日本人の精神，心が引き継がれているもの1
・質素1
・自然（nature, natural どちらの意味もありうる）1
・心の内面や精神的なものが働きかけてくる1

視覚からのイメージ
・着物／はかま6
・派手な化粧1
・豪華なイメージ1

歴史に関するイメージ
・歴史が長い4
・親子が代々受け継いでいる1

その他
・難しい10
・怖い／子どもが泣き出しそう8
・近寄りがたい／気楽に見に行けない6
・何を言っているのかわからない／言葉がわからない6
・堅苦しい5
・厳格／厳か5
・親しみづらい3
・触れる機会がない3
・面白くない／つまらない3
・不気味2
・わかるまでに時間がかかるが，理解するとだんだん面白く感じるもの2
・知識がないと楽しめないもの2
・ピーンとした空気の中で見るもの1
・静かだけれどインパクトがある1
・重々しい1
・練習や親子関係が厳しそう1
・古い1
・とても興味深いもの1
・少人数でやるもの1
・眠くなる1

声・身体に関することとして，一番多かったコメントは「ゆっくり」であるが，「スローな音楽にスローな動き」「曲を動きで表現する」という記述に注目したい。動き，つまり能で言えば身体による表現である舞が音楽と深く結びついているという認識。このことは，能の声と身体による表現を考える上でも非常に重要である。学生は無意識にこのような言葉を使ったかもしれないが，能の舞の本質にある「抽象性」にふれる考え方に発展する可能性があるかもしれない[4]。声と身体による生き生きとした表現としては「ピョンピョンはねて野太い声で物語を唄っている」が目立つ。おそらくこれは狂言のイメージではないかと思うが，声と身体によるドラマという意味では能の特徴と重なる捉え方といえよう。

自国の文化としては，学生たちが「精神」「心」「内面」ということばでイメージを表現しようとしていることに注目したい。日本的と思える，古の「風情がある」「大切な」「奥ゆかしい」美意識は「精神性」と結びついている。

その他の中の，「難しい」「言葉がわからない」ことと「面白くない／つまらない」ことは関連があるだろう。一方で「知識がないと楽しめない」「わかるまでに時間がかかるが，理解するとだんだん面白く感じる」と書いた学生もいた。指導する側がどのような導入を考えるかによって，そのあとの学生の興味の拡がりが変わってくる。「怖い／子どもが泣き出しそう」というイメージは，日本の伝統音楽や伝統芸能における精神性とも深く関わっているものである[5]。また「ピーンとした空気」や「静かだけれどインパクトがある」という考えは，日本の音楽を聴いたり体験したりするとよく「ピンと背筋が伸びる」と言われることと関連づけて語ることができよう。型から入ることで生まれる様式美が音楽や表現と深く結びついている。このようなイメージは重要であり，その後の学びにつなげていくべきものであろう。

1）②能のどのような要素が気になりましたか。

「能の要素で気になったもの」として学生があげたものは以下の通りである。数字はその内容の回答人数。一人で複数の要素をあげている。アンケートの質問項目の中に「装束・面・楽器・音楽・表現・所作・物語など」とあらかじめあげておいたので，それに〇をつけた学生もいた。学生の記述を回答人数の多い順に取り上げる。取り上げた要素について学生が記述したコメントで注目したいものを選び，中でも複数学生が記述したコメントには（　）で人数を記した。（数字がないものは一人のコメント）

・音楽（音階・曲調・拍・リズム）21
　メロディーの速度など一定ではなく様々な工夫がなされている／音楽が全然楽しくないこと／音楽がとても悲しげで怖い／音が暗いと思った
・面20
・声（謡い方・声の表現）20
　お経みたい（3）／低音ですーっとひびく声に驚いた／独特の声の表現。こういった声を出すことにどんな意味があるのか／はっきりしゃべらずに，ゆっくりこもったような感じでしゃべっている／迫力ある語り方
・所作・動き・ハコビ16
　動作がゆっくり／摺り足で面を動かさないように歩くこと／
・物語（ストーリー）16
　六道の修羅道などのお話をきいて，大変興味深く感じました
・表現・表現の仕方16
　使う音楽やそれぞれの個性によって表現方法は全く変わってきてその人の考えなどが直に出る点
・楽器11
　ずっと奏でているわけではなく，アクセントや節目で大鼓などを入れるのが面白いと思った
・装束（衣装）9
・間6
・時間がゆっくり5
・舞2
・謡本（楽譜・記譜の仕方）3
・言葉（詞章）3
・歴史・背景2
・見えない世界を描いている2
・歌舞伎とは違う2
・音楽と物語の関係2
・字幕がなければ何を言っているのがわからない2
・謡いながら動くこと1
・昔の人は聞きとれていたのか不思議に思った1
・どんな内容かわからない1
・音楽という感じがしない1
・無音という音の「間」1
・人間の精神をよくうつしている物語1
・無意識の中では感じさせない自然さ，精神1
・能にはどのくらいの歌があるのか1
・不気味1
・雰囲気のつくり方1
・男性が演じている1

音楽についても「怖い」というコメントが目立った。このように感じることは，先述の通り能の精神性と深く関わっているだけでなく，能が成立した中世の時代の死生観とも結びつけて語ることができる。能より前に成立した日本の声楽としては声明があり，その後の日本の声の表現に大きな影響を与えている。「お経みたい」というコメントは，その成立背景や日本の声楽史とともに説明することができるだろう。能には怨霊や幽霊やこの世のものではない存在がよく登場する。鎮魂の芸能と言われる所以だ。そういうことに学生が自ずから気づく要素が能の中には数多くある。

2）謡・型（カマエ・ハコビなど）の体験について

①謡と型を体験してみてどうでしたか。印象に残ったのはどのようなことでしょう。

・所作・動き・ハコビ63
　見るのと実際にやるのとは大違いでとても難しいことがわかった（11）／体重移動（4）／すごく筋力がいる（4）／日舞に似ている部分もあった（2）／型は日本の武道と通じるものがある（2）／プロの能楽師はすごいと思った／基本の歩く動作は意外にシンプルだと思った／リズムが動きの中にもある／カマエの体勢／扇の使い方／視線／摺り足が全くできなかった／もっと体験したかった／アートであり科学であると感じられた。人間の動作，見られ方がよく研究されており，まさに“極み”と言える芸術だと感じた／友達にうまいと言ってもらいました！！カマエの美しさ，足ハコビ，すごいと思いました／先生の舞はかっこよかった
・声（発声・謡い方・声の表現）22
　お経のよう（2）／「翻す」というところも普通に読むのではなく，ひーるがえすなど音に工夫がなされていて楽しかった。謡を体験してみて謡いながらゆっくり動くことがとても難しいことであると学ぶことができた／声を出すのが難しい／お腹の下から響いてくる声／謡の音階が独得で難しい／音程をとるのが難しい／西洋の歌とは違い独得で面白かったが歌いにくかった／高い声や低い声，メロディーの速度など一定ではなく，様々な工夫がなされている
・その他
　どのような気持ちで行えばよいのかわからなくて難しかったです／初歩的なことしか体験できなかったのでいまいち良さ等を感じ取ることができなかった

仕舞の冒頭部のみであったが《鶴亀》の体験は学生たちにとって印象深かったようである。仕舞の時は，シテの謡は最初だけで，謡いながら舞う場面はないのだが，筆者が地謡を謡いながら舞うのをそのまま真似て，謡いながら舞っている者もいた。「謡いながらゆっくり動くことがとても難しい」というコメントはそこから出てきたものだと考えられる。能の登場人物を演じる上で，謡いながら舞うことは非常に重要なことである。時間的余裕がもう少しある場合は，これまで地謡とシテに役割分担して謡と舞を体験させていたが，短い舞であれば謡いながら舞うということも試みてもよいかもしれない。声と身体の表現が一体となって能の演技を創り出していることの実感に結びつくだろう。

また，声の表現について「翻す」が「ひーるがえすなど音に工夫がなされていて楽しかった」というコメントにも注目したい。西洋音楽で言えばシンコペーション的なリズムと音の高低の変化のことを「工夫」と捉えたのだろう。月の都で天人が軽やかに舞う様子が謡われている。このことも声と身体による表現を工夫することに結びつくだろう。

3）能に対する印象・イメージについて

①面白かった／つまらなかった／よくわからなかったなど

・面白かった51

能についてもっと知りたいと思った（5）／生でみてみたい（3）／楽しかった(2)もっと学んだらもっと面白くなると感じた（2）／見ているのと体験するのとでは全然違うと思った／奥深いと思った／声の出し方，衣装もすごいし，動きも一つ一つ重みがあって素晴らしかった／能の世界にひきこまれたというか，やはり日本の文化は素晴らしいと感じました。このような経験を子どもたちにもたくさんさせてあげ，日本の文化に少しでも多くふれてもらいたいと思いました／能は触れることがなかったが，先生の話が分かりやすく楽しんできくことができた

・つまらなかった1

・よくわからなかった15

歌っている言葉が聞きとれずよくわからなかった／以前より具体的なイメージを持つことができたが，あと2回か1回だけでもよいのでもう少し続けてやってほしいなあと思いました／短い時間だったのでよくわからなかった／暗い感じがした（お葬式みたいな……）／わからないことだらけだが，独特な工夫がこらされていて奥が深いものだと思った／よくわからなかったが，わかればとてもおもしろいとおもった／単調すぎて，正直自分にはまだ早いと思った

・その他12

とても大変なもので難しいものだと思った（2）／歌っている歌の意味や所作の意味がわかったらもっと楽しいと思った（2）歴史がすごいと思った／わからないことがまだ多いので調べてみたい／踊りのイメージが強かったが能は演劇なのだと思った／気楽に鑑賞できないものだという印象／面がこわい印象が強くて能全体がこわいというイメージのままだった／能は精神的なものの芸術なので理解をするのは難しいと思った／派手さがなくて退屈だと思った

質問項目の中に書いた「面白かった／つまらなかった／よくわからなかったなど」に〇をつけただけの学生もいたので，実技体験後の「印象・イメージ」については記述が少なかった。質問項目について再考する必要がある。

「面白かった」という感想が多かったが，やはり短い時間の中での体験学習だったので，「よくわからなかった」という感想も目立った。内容を焦点化し，実技体験の方法を工夫する必要がある。また同時に，アンケートの質問項目を再検討し修正する必要もある。

全体的に，学生たちの意欲は大いに高まったといえよう。もっと知りたい，もっと体験したい，生で観てみたい，子どもに伝えたい，といった意見は，ここからさらに発展していくだろう。「歌っている歌の意味や所作の意味がわかったらもっと楽しいと思った」（筆者注：能では「謡う」と言うが，学生の記述のまま）という感想から，謡（詞章）の現代語訳をつくることも考えてみたい。能の所作については，具体的な意味のないものが多いので，「抽象性」「象徴性」といったものが特徴である演劇として，所作や舞を位置づけるように説明することで，能がどういう演劇であるのかということへの理解が深まるだろう。

3）②全体的な感想など自由に書いてください。

声・身体に関すること

・摺り足が興味深かった

・すり足は，頭が上下することを抑え，足をそろえて半歩ずつ進んでいくことを守ると左右にぶれることも制限されているという特徴があると感じた

・「静」を意識するとうまく動けると思った

・とても難しい動きだと思った

・ゆったりした動きの中で様々なことを表現しなければならないのでとても難しいと思った

・茶道の歩き方とも違っておもしろかったです

・リズムも一定で音程もどうとってもよいということだったので，歌う人によってかなり変わるのかなと思った

音楽に関すること

・間や拍などで表現・雰囲気が大きく変わるので繊細な文化だと思いました

・音楽的にも豊かだと思います

・強弱をつけたり，音の高低の変化があって驚いた

能の特徴について

・何百年も受け継がれてきた理由には，能は完全に完成することが難しいからではないかと思いました
・見えない世界や死生観が能の背景にあることが興味深いと思いました
・能の動き方はすごく難しかったけれど，美しさがあるから難しいのだと思いました。歌も独特で“この謡い方でしか表現できない”ということなのだと思いました。この2つを体験することは日本人として必要なことなのではないかと思いました

自国の文化・日本らしいと思える美意識

・日本の文化に触れる（昔のものとか）ことが少ないので，貴重な体験となった
・日本の伝統なので大切にしたいと思う
・日本らしい昔からの文化の表現はおもしろくて良いなと思いました
・日本独得の芸能について日本に住む私たちが知ることは大切だと思いました
・今回の体験はとても興味深いものだったので，能だけでなく日本の伝統文化に関心が持てた

能の歴史や成立背景について

・大陸から伝わったという芸能について知りたいと思った

子どもに伝えたい

・子どもたちにも知ってほしい（2）
・子どもたちに教える場合にどういう教え方をすればよいのか考えたい
・日本の伝統芸能について触れる機会を小学校の中で将来つくりたいなあと思いました。そして，子どもたちに日本の伝統芸能のおもしろさや楽しさに触れ，子どもたちの世界を広げることができるような教師になりたいと思いました。今回能や箏がとても楽しかったので，将来子どもたちと一緒にやったらもっと楽しいだろうなあと思いました（筆者注：15時限中1時限は箏の実技講座）
・小学生には難しいと思うが，学芸会とかでできたら面白いと思う
・将来小学校の授業で能を歌ったりする活動をとりいれて，日本の文化にふれる機会をふやしたいです
・もし私が先生として子どもたちを能につれていくとしたら前もって台詞の紙と物語の内容を学習してからつれていった方が子どもたちの理解や楽しみも深まると思いました
・授業で子どもたちに教える場合は，実際に体験できる環境をつくってあげることが重要だと思った

その他

・体験できてよかった／楽しかった（7）
・もっと学びたかった／45分では足りない／もっと本格的にやってみたい（6）
・日本の伝統音楽・伝統芸能についてもっと知りたいと思った（3）
・能を生で観てみたい（5）
・日本の伝統芸能について，知っているようで何も知らないことに気づきました
・弓道をやっていましたが，弓道も歩き方など作法にこだわっていて，日本の芸能，武道にも通ずるものがありそうだと思った
・日本の武道，仏教とも通じる部分はあるのかなと感じました
・あの衣装を着てやってみたいと思った
・先生，上手くてすごいと思った
・日本の伝統芸能を笑う人はおろかだと思いました
・勉強するたびに面白くなりそうなものだと思います
・久しぶりに引き込まれるという感覚を感じた
・もっと映像を見てみたかった
・今までは，能はゆっくりで眠くなりそうで見ても何がおもしろいかわからなかった。でも言葉に意味があって，その意味がわかるとおもしろいと思った
・祖母が昔やっていたので思い出しながら授業を受けた
・伝統的な文化として教える必要があると思うが，素人がどのように扱っていくべきか疑問に思った
・能の見方を知れば案外おもしろいのかもと思いました

声・身体に関することでは，「『静』を意識するとうまく動けると思った」というコメントが興味深い。能に限らず，身体を通してできるようになる，あるいは身体に染み込むように習得されていくプロセスにおいては，一見矛盾するような仕掛けを見出すことができる[6]。観世銕之亜の言う「アクセルを踏みながらをブレーキ踏む」（2000，p.57）身体感覚とにも通じるところがあるだろう。

「能は完全に完成することが難しいから」何百年も受け継がれてきたという捉え方にも注目したい。能において，演技の技法や演劇としての能を理解し自然かつ自由に演じることを身につけていく場合，「形」「型」「わざ」の順に習得が進むと筆者は捉えており，これらの習得内容に守・破・離[7]を対応させ，これを能における「わざ」習得のプロセスの軸，すなわち方法原理として，このプロセスの解明を試みてきた（中西　2008）。守・破と進んだ後に到達する離は新たな守の始まりであると解釈することができる。ある到達点に達したと思った瞬間に，次の新たな地平が見えてくるような果てしない学びのプロセスがある。そのような考え方は，日本の伝統音楽や伝統芸能の学びを根底を支えている。

子どもに伝えたいという思いやその方法や内容も教師を目指す学生たちの中から自然に出てきた。能で使われている言葉は現代の日本語ではないので，予習が必要な場合も

ある。台詞や物語に関する資料もあったほうがより楽しめるだろう。

「伝統的な文化として教える必要があると思うが，素人がどのように扱っていくべきか疑問に思った。」学校教育の場で授業担当者自身が指導するには多くの困難が伴う。これについては，奥（2015）の意欲的かつ画期的な研究がある。このような問題を実演家と教師がそれぞれの役割や立場を生かして連携協力することが重要であり，映像資料など有効な教材の作成も益々必要となるだろう。

今後もアンケート調査を続けるが，質問項目については，尾藤（2006，2008）の研究などを参考にして再考し，修正を加えたい。

3　声・ことば・身体に焦点化した能の学習の重要性――学習プログラムの構築に向けて

アンケート結果から考察したことを次の通りまとめて今後の活動内容に取り入れることにする。

①能の詞章への理解を深める――学生自身が現代語訳をつくる

②所作の意味を考える――意味がないものもあることに気づく／「抽象性」「象徴性」という能の演劇的特徴に気づく

③声明の唱え方と能の謡い方を比較する――日本の伝統的な声楽の様式にふれる（日本語を，歌う・謡う・唄うなどの違いにもふれる）

④仕舞において，地謡とシテの両方をできるようにする／自ら謡いながら舞う活動を取り入れる

⑤能の舞・所作による動きや謡には，多様な表現があることを知る――登場人物の位[8]によって声と身体による表現を工夫する

これらは能の声と身体による表現とも密接に結びついている活動である。

さらに，筆者が2007年に作成した能の学習プログラム・モデル試案を一部修正し，これに照らして活動内容を再構築してみる。

表1　テーマ別プログラム・モデル
全30時　1時限約90分（2015年中西作成）

メイン・テーマ	主な学習内容	時限
1　能舞台から始まる場・時間	能舞台・楽屋・見所の観察と体験「わざ」世界への潜入	1
2　能の歴史と背景	声明のと能の謡を比較する　能の歴史・成立背景を知る　世阿弥の演劇論にふれる	3
3　稽古見学	稽古場での人や物との関わり「流れ」の観察	2
4　カマエ・ハコビ・謡・仕舞	能楽師による体験稽古　大学教員による実演と指導　所作の意味を考える　詞章の現代語訳をつくる	2
5　虫干し[9]見学	虫干しされている装束・面などを見学したり，装束の修繕などの作業に参加したりする。人から人への伝承の現場に立ち合う	3
6　能の鑑賞	事前学習――詞章の現代語訳の作成・物語の把握　能楽堂での能鑑賞　演劇的特徴に注目　登場人物ごとにその位や演じ方の特徴をつかむ　能の物語と詞章に親しむ	7
7　稽古	「流れ」の理解　「形」と「型」の理解　自分の身体の把握 謡・仕舞の「暗譜」に挑戦　歌いながら舞うことに挑戦	8
8　能楽師へのインタヴュー	「わざ」を感じ取る　能楽師からきく能の特徴　具体的な演目における表現の工夫などをきく	1
9　能の表現・演技	仕舞の発表　発表についての話し合い	2
10　能に関する経験の共有	家族や友人と能について話し合う　能の特徴について意見を交換する	1

ただし，1～10の活動は次の条件に基づいて実施するものである。

○指導者――能の実演家と大学教員が指導する
○学習の場――能舞台または能の稽古場と大学
○発表の場――能舞台または能の稽古場

現在筆者が所属する大学ではこれらの条件を満たすことができないので，現時点では，2，4（大学教員による指導のみ），6（映像資料による），7（大学教員による指導と学生の自主練習），9，10を行う。なお，1，3，5，8の活動を行うために，東京などへの研修旅行を実施しているところである。その結果については機会をあらためて報告したい。

おわりに

以上，本稿では，これまでの研究成果の上に，学生の実態に沿った内容を加味し，能の学習プログラムとして新たな活動を再検討してみた。この内容に沿って能の学習を進めるのはこれからであり，さらにその結果を検討分析して，アンケートも実施しその結果を反映させて能の指導について再考を積み重ねたいと考えている。アンケートについても，修正して実施を続けている。また，卒業生への追跡アンケートも実施中である。最終的に能の学習プログラムの構築を目指したい。

今後の課題として，次のことを考え続けたい。

○学習プログラムの内容として何が有効か
○音楽科の授業に組み込む場合に何が重要か
○学生が教師になった時に何を身につけているべきか
○学生が教師になった時に子どもたちに何を伝えたいと考えるのか

付記

本研究は，JSPS科研費25381158「小学校教員養成課程における音楽指導力向上のためのプログラム・モデルの構築」の助成を受けたものである。

【注】

1）能の演技の基礎が声の表現である謡と身体の表現である舞にあることは言うまでもないが，世阿弥も伝書の中で声と身体の重要性や結びつきについて「舞歌二曲」「舞は声を根となす（舞声為根）」という言葉で繰り返し述べている。

2）生田は『「わざ」から知る』（2007）において，「わざ」世界への潜入とは，師匠の示す「形」を弟子が模倣する段階において，まずはその「形」だけでなく，そこにおかれた自分の状況も含めて「善いもの」として同意し，稽古場での人や物との関わりも含めたその世界全体のリズムと自らのリズムをエントレイン（entrain）させ始める出発点に立つことであると説明し，その重要性について繰り返し述べている。

3）謡の節の様式をあらわす用語で，ヨワ吟に対する概念。強い息遣いによる振幅の大きいナビキが特徴的な謡い方。

4）観世銕之亟（八世）は舞の本質を音楽との関わりにおいて説いている。「舞というのは，ある抽象性だと思う」「言葉はしょせん言葉ですから，その言葉をやめて音楽にする，つまり，鼓や笛だけの時間をつくるのです。言葉があると，その言葉について意味を理解しなければならないということがありますけれど，楽器だけですと，ある抽象性が成り立つんですよ。それが見ている人の感性のなかに広がっていく（中略）。芝居全体からみると，舞の前後には文学があって，それを謡という形で表現しているわけですが，その謡をあるところで一瞬とめて，そのとめている時間を拡大するというのが，能における舞のいちばんの基本なのだろうと思います。」（2000, p.88）

5）能の精神性を一言で言うなら「畏れ」だと筆者は考えている。2006年3月～2007年9月まで能の試験的な学習プログラムを行った際，受講者の一人が「私はあの能舞台に上がらせていただいた，という事実自体に感動しました。（中略）とっても神聖な気持ちになりました。ふつうの生活でそういう神聖なものへの怖れとか，尊敬みたいなものを感じる機会って少ないと思います。でもそういう気持ちってすごく大事なんじゃないかなあ，と思いました」とコメントした。このような意識は「わざ」世界への潜入の体験と深く関わっているといえる。（中西　2008，2015）

6）西平は「交叉反転」という概念によって説明している（2009，pp.45-49, p.154, p.249）。

7）江戸千家不白流の祖川上不白（1716～1807）の言葉だという（源　1989，p.254）。

8）能楽において演技・演出全般を規定する理念。演じる人物の役種（シテ，ワキ，アイ，地謡など）と役柄（老人，女，男，僧，神，鬼など）の別を把握し，理解した上でつくられる全体的な表現方法（西野・羽田　1987，p.305）。

9）演能で使っている装束や面，道具類を蔵から出して舞台や見所に広げて風を通し，蔵も燻蒸して虫払いする夏の行事。装束や道具類で修繕が必要な部分を直す作業も行う。期間や方法はその家によって異なる。筆者は2000年から銕仙会能楽研修所の虫干しで装束修繕のお手伝いをしており，学生の見学もさせていただいている。

【引用・参考文献】

生田久美子（2007）『「わざ」から知る』（コレクション認知科学6）東京大学出版会。

伊野義博（2011）「なぜ日本の舞・踊りは音楽教育と結びつかないか――民俗芸能を切り口として――」『音楽教育実践ジャーナル』vol.8 no.2（通巻16号）2011年3月，日本音楽教育学会，pp.6-13。

奥忍（2015）「能楽師と共に創り上げる能の表現学習――《船弁慶》を中心に――」『音楽教育実践ジャーナル』vol.12,no.2，日本音楽教育学会，pp.88-99。

表章・加藤周一校注（1974）『世阿弥　禅竹』（日本思想大系 第24巻）岩波書店。

観世銕之亟（2000）『ようこそ能の世界へ――観世銕之亟能がたり』暮らしの手帖社。

久保田敏子・藤田隆則編（2008）『日本の伝統音楽を伝える価値――教育現場と日本音楽』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター，付録CD付。

中西紗織（2008）「能における『わざ』の習得に関する研究――事例分析からの学習プログラムの開発を通して

――」東京藝術大学大学院音楽研究科，2007年度博士学位論文。
中西紗織（2011a）「能における声と『身体』――声を『身体』の側面から見直す試み――」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第61巻第2号，北海道教育大学，pp.277-283。
中西紗織（2011b）「大学生を対象とした能の授業に関する考察――能の学習プログラムの構築に向けて――」『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』第43号，北海道教育大学釧路校，pp.105-111。
中西紗織（2013）「世阿弥の伝書に見える『声』に関する一考察（2）――一調・二機・三声に焦点をあてて――」『『釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要』第45号，北海道教育大学釧路校，pp.99-105。
中西紗織（2015）「小学校教員養成課程における音楽指導力向上のためのプログラム開発に関する研究――実演家と大学教員との連携による教授・学習方法を考える――」『全国大学音楽教育学会創立30周年記念誌』（研究紀要第26号合併号），全国大学音楽教育学会，pp.93-102。
西野春雄・羽田昶（1987）『能・狂言事典』平凡社。
西平直（2009）『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会。
日本学校音楽教育実践学会編（2001）『日本音楽を学校で教えるということ』音楽之友社。
尾藤弥生（2006）「日本の伝統音楽『声』に関する実技学習の効果についての研究」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第57巻第1号，北海道教育大学，pp.313-326。
尾藤弥生（2008）「教員養成における『謡曲』学習の実践効果に関する研究」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第59巻第1号，北海道教育大学，pp.59-73。
源了圓（1989）『型』（叢書・身体の思想2）創文社。
文部科学省（2008a）『小学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社。
文部科学省（2008b）『中学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社。

（釧路校講師）